

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2017.9) 平成28年度:31.

片麻痺がある脳卒中患者の家族が考える退院の背景

下条 玲

片麻痺がある脳卒中患者の家族が考える退院の背景

旭川医科大学病院 10 階東病棟 ○下条玲

キーワード：脳卒中、リハビリテーション、退院支援、家族、ADL

【目的】

脳卒中により片麻痺が生じた患者の家族が自宅退院を考える過程や背景、必要と考えるADL (Activities of Daily Living: 日常生活動作) 状況とその後の生活における実際を明らかにする。

【方法】

C病院に通院中で、現在自宅で生活している片麻痺のある脳卒中患者の家族(A氏の妻、B氏の実父の計2名)を対象に面接を行い逐語録を作成した。また、逐語録をもとにコード化を行い、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。

面接実施当日に書面と口頭で説明し同意を得た。説明文書には、本研究の目的、方法、研究参加は自由意思であり、不参加による治療の不利益はないこと、個人情報保護することなどを記載した。本研究は研究者の所属する施設の倫理委員会の承認を受け実施した。

【結果】

逐語録から、【自宅退院を考えたきっかけ、自宅退院への気持ちを強化したこと】【自宅退院のための準備】など5つのカテゴリー、〈本人・家族ともに支度退院を目標としていた〉

〈車椅子での移動が最低条件だった〉など20のサブカテゴリーを抽出した。

【考察】

先行研究では、食事や排泄の自立、歩行能力の獲得が自宅退院を目指す上で重要とされていた。今回の2事例でもリハビリテーションにより歩行能力を獲得できたこと、食事、トイレ動作について概ね自立したことが自宅退院につながったものとする。

2つの事例の間には移動方法という点で自宅退院を考えるADL条件に差が出ていた。これは、同居する家族から常に介護を受けられるA氏と、日中の数時間、自力で生活する必要があるB氏の違いとして表れたと考える。

家族は退院後の生活のイメージと実状に大きなギャップは感じていない。理由としては、試験外泊などで退院後の生活をイメージし準備していたことが考えられる。退院後の生活におけるギャップを軽減するには、試験外泊などにより現状と今後のADLを踏まえて家族が介護可能な時間・内容をイメージすることが必要と考える。